T I C O

Face to Face

TICOは保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。
地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々とわかち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター　No.32　2013年1月号

ザンビア
ンコンジェ小学校
ついに完成したンコンジェ小学校のお披露目式の様子についてご報告します。
☞*p.2–3*

ザンビア
安全な妊娠・出産支援
実施した研修とピア・エデュケーターの活動についてご報告します。
☞*p.4–5*

ザンビア
安全な妊娠・出産支援
「お産を待つ家」のオープンに伴い、開所式の様子についてご報告します。
☞*p.6*

支援のカタチ
ゆず狩りを通じた支援の輪を（株）柚りっ子　三澤代表取締役に語っていただきました。
☞*p.7*

集団研修事業受入
JICAの集団研修事業「へき地での保健医療体制の向上コース」の受入れについてご報告します。
☞*p.7*

大量絶滅の時代 ～人類はレッドリストに載らないか？～

TICO 代表　吉田　修

地球上に生命が誕生して以来、ビッグファイブと呼ばれる5回の大量絶滅時代があったことが分かっている。有名なのは巨大隕石の衝突によるとされる恐竜などの絶滅である。そして現在に至る時代を「完新世大量絶滅」と呼んでいる学者がたくさんいる。特に20世紀以降動植物の絶滅のスピードは急速に速まっており、これから百年の間に地球上の半分の種が絶滅するのではないかとさえ言われている。毎年1千～1万種の生物が絶滅していると推察されているらしい。日本では、絶滅の恐れのある3155種がレッドリストに登録されており、最近では高知県で最後に目撃された日本カワウソが絶滅したとの報道があったばかりである。

この近年の大量絶滅の原因は何であろうか？それは、もちろん我々人類の活動である。人類が農耕を始めた時から小さな環境破壊が始まった（もちろん現代の農薬を大量に使う大規模な農業の悪影響の方がはるかに大きい）。その後の産業革命、森林破壊、農地の拡大、化学物質の拡散、そして地球温暖化などにより大量絶滅の時代に突入した。また、人、物の移動の増加により外来種が在来種を駆逐するという問題も世界中で起っている。日本ではブラックバスやミドリガメなどが深刻な問題となっている。

これからのことを考えると悲観的にならざるを得ない。どのような思い切った政策転換をしてもこの状況は止められないと考える学者が多い。また、石油資源の枯渇が迫っている。ピークオイル(原油生産のピーク)は2007年という説もある。現在の農業ではエネルギーを大量に使った化学肥料と農薬の投入が欠かせない。従ってピークオイル後は農業生産も減少すると推測される。

よしだ・おさむ：自称兼業農家（外科医）
徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療支援活動を実施。現在吉野川市山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながら、代表としてTICOを運営。

その上に、国家財政の破綻も必至である。アメリカ、日本は莫大な財政赤字を抱え、アメリカは莫大な貿易赤字も抱える。日本も東日本大震災後に貿易収支は赤字に転落した。輸出企業は円安を望んでいるが、円が暴落すると石油や天然ガスを買えなくなる。どちらに向かっても状況は非常に厳しい。国家に対策を期待しても望み薄であり、経済成長を前提とした長期戦略はありえないと思えてくる。

地球温暖化、ピークオイル、それに伴う食糧危機、財政破綻の時代が既に始まっている。この人類始まって以来の危機を我々は乗り越えられるのだろうか？

方策としては、再生可能エネルギーと有機農業を基盤とした地域で循環する経済圏を再構築するしかないのではないか。その時は円を使わずに地域通貨を流通させるようになるのかもしれない。実際にそのような取り組みも始まっている。

高度経済成長の中で育った我々の思考の大転換が何よりも必要である。先進国の人間は今こそ少数民族や途上国の人々の暮らし方から多くのものを学ばなければならない。さもなければ、人類自身が絶滅危惧種レッドリストに登録されてしまうのかもしれない。

ンコンジェ・コミュニティスクール

校舎完成後、トイレ5棟（生徒用4棟、教員用1棟）と有資格教員を派遣してもらうための住宅1棟の建設が続いていたンコンジェ・コミュニティスクールですが、10月末すべての建設作業が終了し、11月28日に地元住民およびチボンボ郡関係者へのお披露目式が執り行われました。

完成したトイレと先生の家

支援前の教室の様子

初より教師の入れ替えがほとんどありません。またPTAも活発で毎学期に総会と通常会議を開き、安定した学習機会を生徒達に提供してきました。しかし資金面での苦労は多く、校舎は10年前の村人の手によるレンガ作りのまま。500人の生徒がたった3教室を共用し、校舎が狭い為に教室の中は湿気がひどく、窓には窓枠も窓ガラスも入っていないため、絶えず砂埃が舞い込む状態。トイレも、住民が建設したトイレが2棟のうち1棟は雨でくずれてしまったために500人の生徒が1つのトイレを使用している有様で、教員は隣に住む校長先生のトイレを借りるほかありません。

まず「コミュニティスクール」についておさらいしましょう。日本では学校というと公立と私立がありますが、義務教育の場合、公立学校ですべての生徒を受け入れることができる、というのが大前提ですよね。ところがザンビアではこの公立校の数が圧倒的に足りません。それを補完するのが、地元住民によって建てられるコミュニティスクールです。校舎を始めとして、机やいす、教材等の設備、教員の確保も住民の尽力次第。教員の給与も住民からの寄付でまかなわれます。
ンコンジェはコミュニティスクールには珍しく、2001年の設立当

これらの現状を受けて2010年9月、ンコンジェ・コミュニティスクールへの支援は始まりました。町から遠く離れ、雨季は特にアクセスが悪くなる地域のため、建設会社に外注するのではなく、住民参加型の手法を取りました。村で選出された大工が建設の指揮をとり、作業員を村から募ることで雇用機会と技術習得の機会を提供し、また自分たちで維持管理できるというメリットがあるためです。ただ村の主体性を重んじる手法のために、納期は遅れに遅れ、やきもきすることもたびたび。それでもやはりこの手法でよかったと今では感じています。

▲場を盛り上げてくれた地元バンド

▲2日前から準備が進められた伝統的な飲み物“チブワントゥ”。ドラム8本分！参加者全員にふるまわれました。

▲▶来賓および列席者へ出す食事の準備をするお母さんたち

猫目線

みなさん、こんにちは。雨期の暑さにすっかりバテてしまった猫のチャイです。私の住む首都ルサカは日本と変わらない生活を送れるほどに発展していますが、ご主人の活動する村ではまだまだ昔ながらの習慣が根強いようです。例えば行政区画として州、郡、区といった近代的な区割りがある一方で、伝統的な酋長（チーフ）を筆頭とする統治システムも健在です。大統領と直接のやりとりが可能という地位の高さで、村長レベルで解決できない日々のトラブルはパレス（宮殿）と呼ばれるチーフ邸宅に供えられた法廷に持ち込まれます。村人にとっては政府の役人や政治家よりも身近で畏怖すべき存在のようです。ご主人も初めて謁見したときには、ひざまずきチーフを讃えるかしわ手を打ち鳴らしてから用件に入ったと言っていました。ただご主人にとって一つ納得がいかないのは、式典にチーフを招いた際にふるまう飲み物の定番がコー○やファ○タといった炭酸飲料だということ。メイズ（とうもろこし）で作られる伝統的な飲み物“チブワントゥ”ではNGらしく、必ずこれらの炭酸飲料を準備するよう関係者に何度も念押しをされるほど大切なアイテムなんだそうです。村では希少価値を持つがゆえなのでしょうが、やはりどこか腑に落ちないご主人なのでした。にゃー。

ついにお披露目！

さて、お披露目式当日はあいにくの曇り空。それでも2週間以上前から、ンコンジェの村人と学校関係者が村をあげて式典の準備を進めてきたこともあり、私たちが現地に到着したときにはすっかり準備万端。彼らの気合のほどがうかがえました。

▲新しい教室を一目見ようと集まる人たち

結局、主賓が3時間の大遅刻をしたため、式は遅れて始まったのですが、来賓のスピーチも、その合間に入る村人や生徒たちのパフォーマンスも、非常によい雰囲気の中、つつがなく進められました。この「つつがなく」というのは、ザンビアで活動していると本当に奇跡のようなことで、裏では先生や村人たちが忙しく駆け回り、粗相がないように常に気を配り、議事進行をサポートしてくれました。村全体でこのンコンジェ・コミュニティスクールの完成を祝っているのが本当に伝わってきて、とても幸せな気持ちになりました。

式が終わった後、生徒たちに新しい校舎のどこが好きか聞いたところ、「雨が降れば体も教科書もびしょぬれになったけど、いまはしっかりとした屋根になってうれしい」「昔はれんがや丸太の上に座って勉強していたけど、いまは机で勉強出来て快適」「床がコンクリートで磨かれているから、前のように砂埃があがらずせきをしなくなった」「トイレにはいつも長い列ができて混んでいたけど、数が増えたいまはもっと気軽にトイレに行くことが出来る」といった声が聞かれました。

▲ンコンジェ合唱団。普段は他の学校からも一目置かれるうまさですが、当日はかなり緊張気味でした。

▲ンコンジェの学校の歴史とそれにたずさわってきた人々を讃える物語を朗々と歌う女性。

TICOとしての支援はこれで終わりですが、政府からの有資格教員の派遣や、公立校への格上げ、小学校卒業認定試験の実施とよりよい教育環境を目指す彼らの道のりはまだまだ続きます。本校から巣立った子どもたちが、明るいザンビアの未来を作り上げていくことを願ってやみません。

▲当日は大忙しだったンコンジェの先生たち。4人そろったこの写真を撮るのが大変でした。600人を超える生徒をこの4人で教えていますが、全員無資格のボランティア。有資格教員が政府から派遣されるのを待ち望んでいます。

なお本事業は公益社団法人セカンドハンドからのご寄付とご理解なしには成立しえませんでした。ここに改めてンコンジェの村人たちを代表し、厚く御礼申し上げます。

ザンビア／チボンボ郡
地域住民が支える安全な妊娠・出産支援事業

▲劇中にSMAG役（左の女性)が登場し、「なぜ家族計画やバースプランが大切なのか？」「安全なお産や妊娠のために事前によくパートナーと話し合おう！」といったメッセージを夫婦役（右側にいる二人）に呼びかけることを通して観衆へ伝えます。

啓発劇で正しい知識を人々に伝え、地域を変えていこう！

2011年8月にSMAG(安全な妊娠・出産を支援するボランティアグループ：スマッグ)を対象とした啓発劇研修が行われてから約1年が経過し、前回の研修を復習するために行われた今回のリフレッシュ研修。

正しい知識を芝居仕立てで人々に伝え、人々の行動を変える一助となることが啓発劇の大切な役割です。今回の劇の台本は「家族計画とバースプラン」。講師は、前回と同じくアート系NGO団体からザンビア人の講師をお招きしました。

「人々に正しい知識を伝え地域を変えていこう！」政府の介入を待っているだけではなく、あくまで住民主体で地域を変えていくことが“今”必要なのだと講師からSMAGへ伝えられます。

「台本は正しく読むこと。嘘は本当のことよりも早く人々に伝わってしまう」

啓発劇も一つ間違えば誤った知識を村中に広めてしまいかねません。

「村にあるもので話をすること。人々の視点で劇を行うこと」

例えば生活衛生の話をする際に、水道の蛇口を話題に挙げても村に蛇口はありません。教える立場になった途端に忘れてしまいがちなことです。

このような話を交えながら研修は進み、「家族計画とバースプラン」の台本を暗記、講師からの表現指導が加わり、啓発劇が出来上がっていきます。

ピア・エデュケーターたち、大活躍！
10代の妊娠にレッドカード！

▲10代の妊娠にレッドカード！という力強いメッセージでパフォーマンスを締めてくれたギルバート君

モンボシ地域での若年妊娠防止のために、2012年5月に養成されたピア・エデュケーター（同世代に特定のメッセージを伝え啓発する役割を持つ学生）たち。

彼らの日々の活動を後押しするため、10月19日に学校対抗イベントを開催しました。研修を受けた10校のうち8校から参加があり、啓発のための歌や詩、ダンスや劇など日ごろの成果を発表し合いました。

啓発劇をするピア・エデュケーターたち

啓発劇で人々に正しい知識が伝わるの？

実は私自身、研修が始まるまで劇で本当に正しい知識を伝えることはできるのだろうかと一抹の不安を感じていました。しかし、研修を終えてみると、その不安はどこへやら。劇を演じるSMAGと、鑑賞しているお母さんたち双方の生き生きとした表情。体いっぱいで表す豊かな表現力！演劇の後には再度劇中の大切なキーワードがSMAGにより解説され、質疑応答の時間もあります。劇前後の歌やダンスによって人々の気持ちが解きほぐされ、曖昧な知識が確実なものになっていく過程を見ることができました。観衆として集まった住民たちが一緒になって踊っていることも！ザンビア人にとって歌い、踊ることはあいさつのように身近なことなのかもしれません。

研修最終日。SMAGの演技にも力が入ります！

バースプランってなに？

今回の台本のタイトルにもあるバースプランをご存知でしょうか。一般的には妊婦さんやその家族が出産から育児についての希望を盛り込んだ計画書のことを指します。出産する側が主体的に、より満足できる出産ができるようにというのが目的のひとつ。日本でも多くの産婦人科や助産院で導入されています。

しかし、ここザンビアでは妊娠・出産はごく自然なこと。ザンビアのお母さんたちは「赤ちゃんを産むのは自分！」と当たり前のように考えています。そのためバースプランは日本のものと少し意味合いが違っています。こちらのバースプランは、出産のために何を、いつ、どのように前もって準備するのか。緊急時にはどういった対応を取るのか。といった産前準備計画書のことを指します。「妊婦さんの命」を守るための計画書。という言葉の方がしっくりくるなと私は思っています。

▲いつも陽気なSMAGたち。日頃から歌い踊ることが大好きです。

▲啓発劇を見るために集まってくれた住民たち。時折会場から笑いも起こります。

SMAGにとっても歌は知識を覚える重要なツール！

今回の研修で、SMAGに事前に伝えていた宿題がありました。「妊娠期の重要な危険兆候」を含んだ歌を地域ごとに(モンボシには9地域あります)作って持ち寄ること。

SMAGが地域で啓発する際に使う歌ですが、SMAG自身がまずは正しく知識を覚えていることが最低条件です。実は、6月の中間評価の際にSMAGに行ったテスト結果から妊娠期の危険兆候の理解が十分でないことが分かりました。ペンやノートは簡単に手に入らない村ですが、歌はどこでも歌うことができ知識を覚えるための重要なツールにもなりえます。「妊娠期の重要な危険兆候」の歌をSMAG自身が作成し歌うことにより、知識のブラッシュアップが出来たようです。

今回の研修の収穫は、9つある地域の垣根を越えた結束がさらに深まったことも挙げられます。研修を通して学んだ演劇を自分の地域だけでなく、地域を超えてSMAG同士が協力し合い啓発劇を行おうという案が自主的に出てきたのです。地域ごとに切磋琢磨しながら、良いところを学び協力し合いながら活躍してくれることが非常に楽しみです。

2010年10月から始まった、ザンビア・チボンボ郡モンボシにて安全な妊娠・出産のための環境づくりを目標としたプロジェクト。JICA（国際協力機構）から「草の根技術協力事業」として委託を受けています。

お産を待つ家オープン！

▲左から郡保健局代表、TICOザンビア事務所代表瀬戸口、診療所アイビー看護師によるテープカットの様子

2011年5月に建設着工、2012年4月に完成したお産を待つ家。ついに11月9日、開所の日を迎えることができました。

人々の意識の変革と共に並行して行わなければならないのが環境を整えること。SMAGによる「妊産婦健診の必要性、施設分娩の重要性」といった安全な妊娠・出産に関する知識の普及により確かな地域の変化を感じていますが、それを受け入れることのできる環境がなければ人々の意識は逆に離れていってしまうこともあります。

これまではお産を受け入れることのできるベッド数が診療所に2床しかありませんでした。生まれる直前に施設に駆け込み、出産後は早ければ4時間後には施設を出なくてはならない状況でした。遠方から訪れる妊婦さんの中には施設への道すがら命を落としてしまうこともありました。

当日は多くの住民が開所式に出席

お産を待つ家には最大8名の妊婦さんと家族が待機できます。これからは出産予定日の２週間程前から待機し、助産師による安全な出産、そして産後健診を確実に受診し退院することが可能になります。また、出産前から待機できるため助産師による危険兆候の早期発見がしやすくなり、必要に応じて上位病院への転院も可能です。

これまでお産を待つ家建設にご支援くださったみなさま、本当にありがとうございます。おかげさまで、ようやくスタートラインに立つことができました。今後はお産を待つ家の使用状況についてお母さんや家族の声をザンビアからお伝えしていきたいと思っています。

今後とも、どうぞご支援よろしくお願いいたします。

離任のご挨拶

庄田多江（事務局員）

地域住民の自立を支援するだけでなく、日本人のライフスタイルの見直しを謳ったTICOの方針に感銘を受け、事務局を訪れてから3年8ヶ月。たくさんの想い出がつまった徳島を離れることになりました。

ザンビアとカンボジアのために、と支援してくださるさくら診療所やわらびの会をはじめとする会員や支援者の皆様、それに精一杯応えようと活動してくれる国内や在外事務所のスタッフ、現地のスタッフ、地域住民の方々…。事務局で多岐にわたる業務に携わり、貴重な経験をさせていただいたのも、皆様に支えられ、多くの学びとご縁をいただけたからです。心から皆様に感謝いたします。

TICOは来年20周年を迎えます。私自身も応援する側にまわりますので、引き続きTICOへの温かいご支援ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

お世話になり、本当にありがとうございました。いただいたご縁とご恩はいつか何かの形でお返しできればと思います。

着任のご挨拶

近森由記子（事務局員）

みなさま、はじめまして。このたび2012年11月からTICO事務局でお世話になっております近森由記子と申します。

TICO事務局員は、代々協力隊OVがほとんどなのだそうですが、私は全く経験がないままにTICOに飛び込んでしまいました。TICO事務局でも新たな挑戦かもしれませんが・・・しかし、迎えていただいたTICOには感謝でいっぱいです。TICOの方針は私のモットーでもある「Think globally, act locally」（世界規模でものを考え、身近な地域で活動する）と重なるところがたくさんあります。たった１つしかない地球を、世界中の人で持続可能的に暮らしていくためには、自分が暮らしている地域で考え、行動していくことが何よりも大切であると思っています。

私の生まれ育ったこの大好きな徳島に少しでも恩返し出来るよう、そして様々な問題を抱える世界の状況が少しでも良くなるようTICOで頑張っていきます。どうぞよろしくお願いいたします。

下段：庄田　上段：近森

支援のカタチ　～株式会社柚りっ子代表取締役　三澤澄江さんの場合～

趣味から始まったゆず味噌作り。「美味しいからぜひ買いたい。」という声に答え、ゆず味噌「柚りっ子」が誕生しました。
そして、高齢化の進む山間部には、収穫されずに放置されているゆず畑が多くあることを知り、これらのゆずを生かした商品を製造販売しています。

私は、38年務めた職場を定年退職した後、「徳島県男女共同参画の女性リーダー養成海外派遣事業」に応募し、9日間カナダへ行きました。そして、徳島県の海外派遣事業参加者歴代のメンバー「ペローラ」で廣瀬文代さんと出会いました。廣瀬さんは、代表の吉田先生からTICOの活動を知り、お仲間と一緒に「わらびの会」を結成されています。「わらびの会」は、休耕のゆず畑を借り有機肥料と無農薬でゆずを育て、売ったお金をザンビアの活動資金としてTICOへ寄付しています。しかもその収益のすべてがTICOの活動に生かされています。私は、そのことにとても感動し、ぜひ協力したいと思いました。
2005年からは仲間とともに「わらびの会」主催のゆず狩りに参加しています。ゆずのトゲと戦いながら一生懸命にゆずを収穫し、わらびの会のメンバーやボランティアの方々と食べるカレーライスのおいしいこと！翌年からは、「柚りっ子」の原料である甜菜ロック氷糖でつくる「おぜんざい」を持って参加しています。また、宣伝も兼ねてゆず狩りに参加された方には、「柚りっ子」をプレゼントしています。

「柚りっ子を買ってくださると、その一部が、ザンビアを支援している。」と思うと「柚りっ子」がまた美味しく愛おしく感じられます。また、添付するチラシにも、「わらびの会」が主催するゆず狩りへの参加を呼びかけ、毎年、県外からも参加者がいらっしゃいます。

私たちの企業理念「山の恵みを街に　街のやさしさを山に　ゆずりっこ」の実践のためにも、TICOの活動を多くの人に伝えていきます。
「柚りっ子」は、まだ企業としては小規模で、収益もほんのわずかです。でも、出来るだけゆずを多く高く買い取り、ささやかながらお力になれたらと思っています。

JICAの集団研修事業受け入れ

2012年10月15日から11月3日までの期間、JICAの集団研修事業「へき地での保健医療体制の向上コース」の受入れを行いました。ラオス、ベトナム、パプアニューギニア、ウルグアイ、ガーナ、ケニア、タンザニア、ナミビア、南アフリカ共和国、ジンバブエから14名の研修生が来徳し、新しくできたばかりのさくらcafeを拠点に、徳島県各地で研修を行いました。

最初に各研修員の国・地域の保健医療事情について報告してもらった後、徳島県庁、中央広域連合東消防署、半田病院、ホウエツ病院、徳島保健所、徳島大学病院、美馬保健所、美馬市保健センター、森山小学校、ホウエツ病院、木屋平診療所、海部病院、出羽島診療所、上勝町及び上勝町診療所、徳島県立中央病院、さくら診療所を訪問し、合計28回の講義と18回の実地研修を行いました。また、吉野川市ヘルスメイトの方からも活動内容の紹介をしていただきました。訪問先の皆様並びに講師の皆様には、詳細な資料の作成や準備、そして丁寧なご説明をいただき、誠にありがとうございました。木屋平診療所では往診に連れて行っていただき、患者さんのお宅でご接待までしていただきました。さらに森山小学校では児童と交流することができ、研修員は感激していました。他にもたくさんのエピソードがありますが、紙面の関係ですべてご紹介できないのが残念です。研修員の熱心さにはこちらがついていけない時もあるほどで、活発な質疑が印象的でした。また、学生との交流や研修員同士のディスカッション等を通じ、各国の保健医療事情や文化の一端を知ることができ、私たち自身も学ぶことの多い事業でした。

コースの締めくくりとして、研修員が各国・各地域に戻った後に実践できるようアクションプランを作成してもらいました。今回の研修がそれぞれの国・地域での保健医療の向上に役立てられることを願います。

事務局長 福士庸二のつぶやき　サイクリング万歳!!

ここ数年、初日の出は、愛車（自転車）の上で眺めている。元旦の凍てつく空の下、吉野川の土手を朝日に向かってペダルを踏む。寒いのは間違いないが、体の中からなんとも言えない力が沸き上がり、また、1年頑張ろう！そんな気になる。

2006年、健康維持のためサイクリングをすることを心に誓った。安物を買うとすぐ誓いを破ってしまいそうなので、ちょっと贅沢なロードバイクにした。その時、積算計が付いたスピードメーターも一緒に買った。このメーターのおかげで、挑戦は始まった。頭に浮かんだのは「世界一周旅行」。

世界一周旅行なんて、仕事をやめなければ無理！それ以前にそんな金などある訳もない！！
ならばと、こつこつ毎日走って世界一周と同じ距離を走ることにした。「赤道一周」とネットで検索すると「およそ4万km」。

その日から6年、10月の終わり、スピードメーターが40,000を迎えた。黒かった髪の毛はすっかり白くなったけれど、心身ともに若返った。

では、2013年元旦の午前7時、吉野川の土手の上でお会いしましょう。

ご支援ありがとうございました

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

寄付をいただいた方(書き損じはがき等含む)

さくら診療所募金箱、平戸恵、池北國子、石岡ミサオ、秋月良子、白石勝美・久代、河合純子、桜井一夫、みんなのチャリティー、きものの阿部吉田修

会員を更新された方

ホウエツ病院、峰尾武、井口千陽、神園索己、岩松真理、大多和通夫、杉山未紗、井内誉範・晴子、黒岩宙司、三木野博之、山岡智亙、遠藤千鶴、久保真一・恵子、篠原弘子、松田恵美子、大塚内科、中谷加奈子、池見真由、篠原幸隆、大塚和子、新居智次・和世、神谷保彦、凌秦君、木本豪、徳島県医師会、佐藤寧子、木村秀樹、渡部豪・あかり、匿名1

新たに入会された方

大橋瑞紀

●2012年10月1日～2012年11月30日
●順不同、敬称略

書き損じはがきを集めています。

TICOへのご寄付の方法

郵便振替 — 01640-6-37649（加入者名）TICO

銀行振込 — 四国銀行　山川支店（店番号344）
普通 0199692
特定非営利活動法人TICO
代表理事 吉田修
カナ入力の場合は、トクヒ）テイコ

募金箱 — さくら診療所（徳島県吉野川市）に常設しています。

インターネット — TICOウェブサイトのバナー広告をクリックして、そこからお買い物していただくと、代金の一部が寄付されます。詳しくはホームページをご覧下さい。

TICOへの入会方法

会員となって資金面からもTICOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。会員の方には、TICOニュースレター “Face to Face” を毎号お送りいたします。

年会費

賛助会員	個人	¥12,000
	学生	¥6,000
	団体	¥15,000
正会員		¥12,000

※通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい。

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、次の口座へお願いいたします。

口座番号 01640-6-37649
加入者名 TICO

ご住所・ご氏名・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添え下さい。
なお、ゆうちょ銀行自動引き落とし、クレジットカード払いも可能です。詳しくはホームページをご覧になるか、下記までお問い合わせ下さい。

TICOニュースレター Face to Face 第32号
2013年1月発行　発行人：吉田　修
編　集：近森　由記子

特定非営利活動法人 TICO 事務局
〒779-3403　徳島県吉野川市山川町前川120-4
電　話：0883-42-2271（平日 9:30～18:30）
メール：info@tico.or.jp　/　ウェブサイト：www.tico.or.jp